

森鷗外

その多面的なる耀き

— 生誕150周年に寄せて —

2012年度明治大学人文科学研究so主催「公開文化講座 小倉」

受講料: **無料**
(入館料無料)

事前申込: **不要**

2012年11月24日[土]

13:00~17:00 (開場12:30)

北九州市立文学館 福岡県北九州市小倉北区内4番1号
TEL 093-571-1505

共催: 北九州市立文学館

後援: 北九州市・北九州市教育委員会・NHK北九州放送局・西日本新聞・

明治大学校友会福岡県支部・明治大学校友会小倉地域支部・

明治大学福岡県父母会

●タイムスケジュール

【司会】明治大学人文科学研究so公開文化講座開催委員長 大石 直記

13:00~13:10 開会の辞

明治大学人文科学研究so長 杉山 光信

13:10~13:20 館長挨拶

北九州市立文学館長 今川 英子

13:20~14:10 鷗外「半日」の位相

東海大学名誉教授 小泉 浩一郎

14:10~15:00 『鷄』再考 —「読むこと」とはいかなることか—

都留文科大学名誉教授 田中 実

15:10~16:00 鷗外と文学的近代 —「舞姫」が切り拓いたものとは—

明治大学文学部教授 大石 直記

16:00~16:50 『独逸日記』にみる都市文化の体験 —小倉におけるドイツ追想のシーン—

明治大学文学部教授 井戸田 総一郎

16:50~17:00 閉会の辞

明治大学人文科学研究so長 杉山 光信

明治大学人文科学研究所は、地域の文化に学び、関連する研究成果を広く社会と共有していくために、毎年一度、各地で公開文化講座を開催してまいりました。

本年(2012年)は、奇しくも、日本の近代が生んだ傑出した知識人のひとりである鷗外 森林太郎(1862~1922)の、生誕150周年に当たります。これを記念する式典は、日本ばかりでなくドイツ・フランスなど、広く国内外において、目下、活発に行われております。

本研究も昨年来、鷗外に関わる公開講座を学外へ出向いて催すべく、鋭意、その企画に当たってまいりました。本日は、鷗外にゆかりの土地のひとつである北九州市小倉の地において、「森鷗外・その多面的なる輝き」というテーマのもと、公開文化講座を執り行うこととなりました。

言うまでもなく鷗外は、同時代者・夏目漱石と並んで日本近代文学の礎石を築いたのみならず、自然科学や都市整備などの行政問題等々、実に幅広く、また多方面に渡った領野・領域において、膨大にして多彩きわまる業績を残し、日本の近代化そのものと真正面から向き合った偉大な存在です。その巨大な全容を捉えることは、正に至難のわざと言うほかありません。上記のテーマも、そのような鷗外像の輪郭を、いくばくかでも浮き彫りにすることを目指す思いから設定いたしました。

本講座が、鷗外の生涯の歩みをいくつかの局面において照射しながら、鷗外研究の現在の到達点を示すとともに、さらには、困難を極める私たちの生きるこの時代を、講師・受講者とともに、根底から問い直すための好機となりますようにと願ってやみません。

なお、会場の提供を含めて、準備段階で北九州市立文学館の関係各位には格別のご高配を賜りました。末筆ながら、心より御礼申し上げます。

鷗外「半日」の位相

東海大学名誉教授 小泉 浩一郎

鷗外「第二の処女作」(平野謙氏)とも呼ばれる「半日」(明治四二・三、「昴」)には不思議な親和性があります。嫁と姑の劇烈な家庭内対立を題材としながら、奇妙にもここには破局の予感がありません。妻と母との決定的対立という爆弾を破裂させず、家庭という雰囲気や作品に醸し出しているのは、夫である高山峻蔵という優れて柔軟な個性がいるからです。優柔不断とも見える高山の思考や<語り>を追って行くと、妻を批判しつつ実は妻を擁護し、母を擁護しつつ実は母を批判するという複雑なく語り<の陰翳が見えてきます。高山の内部では母による会計掌握の絶対的根拠は既に失われつつあるのです。しかし高山も作者も意識的には、おそらく以上の作品表現の逆をこそ志向していた筈で、意図と結果とのこの逆転現象のうちに示されているものは、混沌とした現実の姿をあるがままに作品に定着し、不都合な真実を見まいとしても見えてしまう作者鷗外固有の「正直」(講演「混沌」、明四二・一・一七)な認識者としての姿勢でした。そこに意識と無意識の癒着や分裂があったとしても「半日」は、やはり「第二の処女作」と呼ばれるのに適わしい作品であったわけです。

略 歴：一九四〇年長野県生まれ。東京教育大学大学院文学研究科修了。
大東文化大学講師を経て東海大学教授。
主要著書：『森鷗外論 実証と批評』(一九八一)
『鷗外歴史文学集第五巻(「渋江抽斎」)』注釈ほか

『鶏』再考

—「読むこと」とはいかなることか—

都留文科大学名誉教授 田中 実

『鶏』は「独身」「二人の友」とともに小倉三部作の一つ、わたくしは一九八四年二月『一冊の講座 森鷗外』に「戦時下の鷗外—「鶏」の方法と構造—」を発表し、その方法(トリック)と構造(カタチ)を追求、この小説の際だった魅力の秘密を主人公石田少佐の内なる時間の在り方、日々平穩に流れる日常の時間を戦時下として生きる独自の精神に求めた。それは物欲とともに放縦な性の欲望をシンボリックに描き、これらを諦視し、時代の欲望の形を超越する(表現)に成功していた。ここには当時文壇で大流行していた自然主義文学のテーマ、性の欲望を内側からくびきとする独身鷗外の独自の姿が語られていた…。

今回は拙稿から四半世紀、ポスト・ポストモダンの今日、小倉の地で、『鶏』を再考したい。

略 歴：1946年柳川で生まれ、大牟田で育つ。立教大学大学院満期退学。
都留文科大学今年度退職。
主要著書：『小説の力』(1996年)
『読みのアナーキーを超えて』(1997年)

鷗外と文学的近代

—「舞姫」が切り拓いたものとは—

明治大学文学部教授 大石 直記

鷗外は、その生涯にわたって、伝統と革新の双方を絶えず見据えながら、両者が、鋭角に絡み合う地点において、<近代Modernity>のあるべきかたちを根源に遡りつつ、真摯に、かつ、粘り強く思考し、また実践しようとし続けた。その際に鷗外が関わった諸領域は、実に多彩にして多岐に渡っている。

ここでは、その始発期における鷗外の動向を、日本文学の近代化へ向けての、その深い(問い)の実質に焦点を据えつつ浮かび上がらせ、その具体的様相がどのようなものであったかを問い試してみたい。採り上げるのは、鷗外の処女作となった「舞姫」である。この、日本の近代小説史の黎明期に、突出した達成を示しつつ現れた小説テキストが、今日においてなお、優にアクチュアルなかたちで呈示し得ているであろう問題性を、その内容と形式の両面から新たに照らし出したいと思う。

略 歴：1957年東京生まれ。慶応義塾大学大学院文学研究科修了。
埼玉大学助教授、共立女子大学教授を経て、現職。
主要著書：『鷗外・漱石—ラディカリズムの起源』(2009、春風社)など

『独逸日記』にみる都市文化の体験

—小倉におけるドイツ追想の—シーン—

明治大学文学部教授 井戸田 総一郎

1899年10月10日の小倉から東京団子坂の母に宛てた鷗外の手紙のなかに、「在徳記はあとはまだ当方にあり、隙あれば直して清書に送る考に御座候」という一節が見られる。『在徳記』は『独逸日記』の元のタイトルであり、鷗外は小倉時代にこのもともとの日記にさまざまな形で手を加えたようである。この講演では、『独逸日記』に記載されているベルリンやミュンヘンなどのドイツ諸都市における観劇や娯楽の体験にフォーカスを絞り、鷗外の記述の背後に展開する当時のドイツの都市文化政策にも触れながら、『独逸日記』の読み方に新しい視点を提示する。

「在徳記」は、そのタイトルからも漢文で書かれていたと推察されるが、それを雅文調の「独逸日記」に「隙あれば直して」いくプロセスのなかで、鷗外の脳裏に存在していたであろう記述の戦略のようなもの一端を浮かび出させてみたいと思う。

略 歴：1950年東京生まれ。ドイツ・アーヘン工科大学大学院文学研究科においてDr.phil.の学位を取得。慶応義塾大学経済学部教授を経て現職。
主要著書：『演劇場裏の詩人森鷗外—若き日の演劇・劇場論を讀む』(慶應義塾大学出版会、2012年)
Berlin und Tokyo -Theater und Hauptstadt (iudicium Verlag, 2008年) 他